HANAKO TANIMOTO

谷本華子のこれまでそしてこれから

新しい世界へどんどん飛び込もうという意欲と行動力を持つヴァイオリニスト・谷本華子さん。多彩な表現に丁寧に向き合う姿からは、演奏家として学び続けることを大切にされる、華子さんの音楽への深い敬意が感じられます。華子さんの探究心と柔軟さ、そして明るくポジティブな空気から生まれる音楽に、多くの方が刺激や勇気をもらっています。お話を伺う中でこのように感じました。

絵と文 Sumire AKASAKA

華子さんのご自宅には、グランドピアノとアップライトピアノの両方があり、お母さまはピアノを弾かれ、おばさまはジャズピアニスト、おばあさまはオルガニスト、そして8歳年上のお姉さまはピアノを習われていて、音楽が身近な環境にあったそうです。

金鍵盤楽器ばかり!!

なんだかこのままピアノを習いはじめそうな空気なのですが、なぜヴァイオリンをはじめることになったのでしょう?

当時、「鶏がラ」と言われるくらいでした(笑)

細くて小柄だった華子さん、

ピアノは体力もないとできない。この子にピアノは無理だろう…

とお母さまが考えてヴァイオリンを始めた説

と

お姉さまが通われていたピアノ教室の先生から

「華ちゃんもそろそろ楽器始めた方がいいんじゃない?」

と聞かれて、お母さまが

「この子にはヴァイオリンさせるんです!」

と言ったことからヴァイオリンの先生を紹介いただき始めた説

ピアノの先生はとても厳しい指導をされる方だった

そうだ、大変なお気持ちだったんだ

マンガをよみながらお姉さまのレッスンを待っていました。

華子さんもはっきりとは覚えていないそうですが、この2つの「ヴァイオリンを始めたきっかけ説」が存在するようです。

きっと どちらもまざりあっているのでしょうね→

5歳からヴァイオリンを始めました。

ピアノは姉に教わっていました。

毎日、泣きながらヴァイオリンの練習していました。小学5年生の時に先生に「コンクールうけてみない?」と言われて受けたのですが、闘争心みたいなものが私にはなくて、西日本大会では1位をとれたけど、全国ではダメだったり、自分からどんどんヴァイオリンをやろうという感じはなかったかなあ

そんな華子さんでしたが、小学6年生の時、コンクールで1位に!

パグ

大の大好きだった華子さん、映画「子猫物語」をみて映画に登場したパグに一目惚れ!

こんなにかわいいだがいるんだ。

パグを飼いたがる華子さんにお母さまは、

なぜ?を…

このコンクールで1位になれたら、パグ犬2匹飼っていい。

が

なる!!

そして見事1位に!!そこで困ってしまったのはお母さま。「まさか本当に獲るとは…!」という思いもあったそうですが、約束は約束。

谷本家にやってきたのは、紳士でレモンチーズのミックスの仔犬でした。

とは初めに思ったものの、結局はとても可愛いかった!

金無垢だ!パグじゃない

1位獲得にはこんな工夫。ソードが

ものにつられてがんばっていたんです。ははは

きっかけはパグでしたが、この受賞をきっかけに、自分でも「ヴァイオリンをやってみようかな」とスイッチが少し入ったと言います。

中学2年生の時にそれまで習っていた先生が新しく先生を紹介してくださいます。

それが森悠子先生でした。

Yuko Mori

当時、森先生はフランス在住。夏に日本へ来るタイミングにレッスンをつけました。

初めてのレッスンでは、指の上げ下げなどーつーつの細かな動きを中心に、2小節分を3時間かけて丁寧に指導していただきました。

「何コレ…ヴァイオリン弾くのが難しいなりそう…」と思いながらも、私の中で"新しいことを学べる先生だ!"という予感もありました。

自分のレッスンはとても細かく指導するから、と森先生がもう1人先生を紹介してくださいました。

ナンドール・セデルケニ先生
Nandor Szederkényi.

紹介いただいて一度レッスンを受けてみたときに

「あっ、この先生、私の好きかも」と思ったんです。

ナンドール先生にレッスンの度に言われた言葉

Just feel it

とにかく音楽というものを感じてどんどんつくっていけ!という新しい方向からのレッスンだったのですが、ここで教えていただいたことは今の演奏にもつながっています。

『なぜテクニックばかり重視するの?』

音楽というのはそこが一番大事なのではなくて、何をそこから感じるか、そしてそれをどう表現するかがもっと大事だというのを教わりました。

基礎(例えば「ラの音のみ」)でどれだけ表現できるか、どれだけ感情をもっているかということもやっていました。

二人のバランスで指導いただきました

森先生 細かいところを見ていただく。

ナンドール先生 大きなところ。全体像を見ていただく。

中学3年生

先生方のおかげもあり

全日本学生音楽コンクールにて1位に!

高校は地元、兵庫県立西宮高校の音楽科へ

現在、特別非常勤講師を務められています

全日本学生音楽コンクールは小・中・高と部門が分かれており、高校の部には3年生でエントリーしようと考えていた華子さん

ピコったのですが

受けるなら今かもしれない!

これは!

高校2年生の時、華子さんの1番得意な曲が本選の課題曲となっていました。

そのため、予定よりも1年はやく受けたところ…

全日本学生音楽コンクール(高校の部)にて1位、併せて兎束賞、東儀賞を受賞!!

高校3年生になり、さぁ進路を考えよう!となったときに、

海外へ出る or 日本で音大へ行く

私はこれからどうなりたいのかな

という2つの道を考えましたがナンドール先生にずっとついていたいと心想いと、将来自分は日本を拠点にしてやっていくだろうな、その為に日本で力をつけたいと考え、東京へ出て進学する道へ!

桐朋学園大学ソリストディプロマコースへ進みます。

なんでだろうと思いつつ、「わかりました」と答え寮へ帰宅

大学では江藤俊哉先生につきました。レッスンが始まったある日、先生がバルトークの楽譜を出してきて「かいてある通りのフィンガリングとボーイングに全部変えてきて。」と課題を出されます。

なるほど…フム これはいいな フム こっちはこうか

今日もらった楽譜

自分がこれまで教わってきたもの

ハンガリー出身のナンドール先生に師事していたので、これまでバルトークについては徹底的に教わってきていて自信ももっていました。

華子さんは、今まで学んできたバルトークの弾き方と、渡された楽譜の「いいな」と思ったものをブレンドして次のレッスンに臨みました。

結果は…

先生激怒。

僕の楽譜通りじゃない!!

その瞬間

世界じゃない

思い描いていた

と思ったそう。

身を託す思いで行った先でつきはなされた感覚になり、頑ところがなくなってしまった気がして…

帰りのバスの中で大泣きしながら「今日を目指す」と思ったんです。

その時の気持ち

そしてヴァイオリンをやめました。

ぱたん

「弾くこと」そのものができなくなってしまったのです。

その状態の華子さんを見ていたお父様がナンドール先生に電話

すると

次の年から日本を離れカナダの大学で教えることが決まっていた先生から言われた言葉は、

行ってらっしゃい

1年が経ち

1度も帰国せず

あ、ただ、楽器だけは持ってきて。

とりあえず気晴らしに(カナダへ)遊びにおいで

翌年2月ナンドール先生と共にカナダへ

カナダ・ブランドン大学へ入学

歩いてるとリスがいる

ブランドン市はカナダの内陸のマニトバ州にあって市内の端から端まで車20分くらいの小さな街。周りは地平線!みたいな田舎なんですが、あの頃は東京に飲まれてしまっていたとこ3日おそらくあって、ブランドンに行って心が浄化されていくというか、それまで溺愛していたものがほどけていきました。

全てがゆるい感じで、市内に日本人は私1人というのも良かったのかもしれません。周りのカナダの人たちも親切にしてくれて、またヴァイオリンを弾き出すことができました。

よかった!!

ヴァイオリンの演奏活動開始した華子さん、大学では、初めてカルテットを組み、ホームパーティなど色んなところへ行って演奏していたそう。

カルテットの演奏で生活費を貯めていました。

カナダ留学2年目の時にはカナダナショナルヴァイオリンコンクールに出場

もっとちゃんと調弦すればよかった…

この時、会場の湿気で弦がどんどんくるっていったそう。

音がどんどん下がってくる

湿気で負けた…。と大ショック!コンクールでの初の挫折でした。

コンクールの結果は2位

それでも2位ってすごいって思いました→

留学3年目、だんだん弾けるようになってきて、日本でも演奏の依頼がきて年に数回は帰国するようになっていました。ナンドール先生からも全て教わったかなと思い、日本へ帰ることを決めました。

学生時代は陸上部に入りたかったそうです

一目惚れ 即行動

卒業を待たずに帰国

3年半ほどカナダにいました

びゅんっっっ

次ページへつづく

日本へ戻ったことを森悠子先生に伝えると

長岡京室内アンサンブル(以後、長岡京)っていうのを立ち上げてみたんだけど、帰って来たんだったら入ってみる?

弦楽器だけのアンサンブル

どんなものかはわからなかったけれどアンサンブルができるんだなぁと入団。

最初のリハーサルでは…

カルテットをしていたとはいえずっとソリストとしてここまでやってきたので、言ってみれば自分の事しか考えない演奏をしていたんですよね。それで合わせた時に一音出すたびに「全部違う」と指摘され、森先生から「周りを聴くという所から始めなさい。」と言われました。

確かにそういうことは教わってなかったです。

それから約1週間、朝10時~夜8時までのリハーサルがみっちり行われ…

ヴァイオリンのせん

4人で1本の細い音に聞こえるように弾かなきゃいけないのにあなたの音量は全部上回ってます!ビブラート禁止!

森

ひぃぃぃ

音を出さないで

それまで自分がちゃんと弾けていると思い込んでいたので、毎日怒られて毎日泣いてました。

その後、初めてのコンサートでの演奏はどうでしたか?

なんだこれは?

それまで聴いた事がないような演奏でした!!

透明感のある澄みきった音。

厳しくてもやめなかったのはこの音が好きだったからだと思います。

このコンサートの演奏は長岡京の最初のCDになりました。

やってみないとわからない!!

結果としてどういう演奏になるのかというのが想像もつかなかったのですが、まずはこの団体に呼んでいただいたのだから従ってみようと思っていました。

長岡京室内アンサンブルには独自の練習がありました。その一部をご紹介!!

不思議と空気が一瞬ピッとなるタイミングがあるそう。

森先生は今までにない発想をどんどん生んでいく方で、

「普通」ということが一番お嫌いでした。

普通の先に行かないとお客さまはついてこないし、先生の中には常に新しいものに挑戦したいビジョンがあったんですよね。

☆背中を向けて音をあわせる

目で見て合わせた時にはもう遅いということで気配を感じるための練習

空間から音を取っていく感覚は今も大事にしています。

お互いに見られない分、音や動いている空気を感じながら、それを目の変わりにして演奏する。

本番でもそれぞれがバラバラに立って行うこともあったそうです!

☆本番前にみんなでジャンプ!意識を上に向けるため

ジャンプ

ちょうどこんな感じでゲネプロを行っていた時、練習を見に来たのが、大山平一郎さんでした。

練習風景

平ちゃん!ねえこれどう?すごいでしょ!?

2人は相思相愛で一緒の仲

それに対して大山さんは

変。

とひと言だけ発して出ていかれたそう。

それを聞いた華子さんは~

全然…受け入れられてないじゃん

こんなに真っすぐ言う人今までいなかった!

同じ年、2017年3月に京都で室内楽を大山先生とやることに

(右上)真由子ちゃんと(右下)鈴木舞さんをいただいた!

リハーサルにて、それまで長岡京の森悠子先生の下で行ってきたビブラートを少なくした演奏をしたところ

ショック…

音が何も出ない

また!

全部違う。

「私のために「ビブラートをやめて」状態になっちゃったんですね。

僕が弾けって言ったんだからいいの

なんであんな弾き方したの!!

やめて

あぁ、全て終わった…

会場に森悠子先生が!!

~公演後~

迎えた本番、なんと

真逆の弾き方ですもんね。

どういう音楽を求めているのか、大山先生の世界を知りたい!

と必死につり行きます。

それでも華子さんは

20代までは「負けたくない!」と食らいつく強い気持ちがありましたが、30代を過ぎると全く立ち直れなくなって。周りの時間を使ってしまっていることへの焦りや不安もあって、パニックになりました(笑)

初共演はよくわからないまま終わってしまいました。それでも、大山先生の音楽を知りたいという気持ちはありました。大山先生の世界はこれまでとは違う新しいもので、私もその流れに乗ってみたいと感じたのです。その後、もう一度ご一緒させていただくことになりました。

譜面の読み方から見直そうと思い、そのとき取り組んでいた曲もお好きだったので、自分なりに考えた解釈を持って行きました。

あなたこの曲お好き?

お好きです。

すると大山先生は

それすごいわかる。

と笑顔で言ったそうです。

この会話をきっかけに大山先生の言っていること、求めていることが見えてきたそう。何かを掴んだ瞬間ですね!

その後も、大山先生が指導されている京都塾、八女の講習会に受講生として参加。

年齢は関係ない!学ぶためには行くしかない

そんな華子さんの努力が認められ2019年、大山先生が芸術監督を務めるMusic Dialogueアーティストに、

2019年の長岡京の公演でソロを弾くことになった時に、「自分のやりたいことをちゃんと入れよう」と思って作ってリハに臨みました。コンサートまで何一つダメ出しはなく、「華ちゃん、こういう風に繊細に音楽を作ってるから、みんなもそうして」という感じで本番を迎え、結果、森悠子先生、そして見にいらした大山先生、おこ人から「すごく良かった」と言われ自分の演奏はこれだって見つけました。

水と油のように全く違うものだと思っていたけれど、求めているところは同じなんだ!と気付きました。

知りたい!というエネルギーを華子さんから感じます。

知りたい!!はこんなところにも。

バッハの無伴奏全曲を弾いていて「バッハの時代ってどんな音出してたんだろう?」とちょっと興味がでたんです。そしたらヴァイオリンから弦から違うものを使っていた。

そこでバロックバイオリンで弾いてみたら、音の人はこう弾いていたからこのテンポなのか、といった違いが見えるようになったんです。

そんな中、コロナ禍になり、これを機に1から全部自分のフォームを見直そうと、もう1回バッハを1個ずつさらい直したんです。そのタイミングでバッハのCDを出してみない?とお話をいただいて、2021年、「J.S.バッハ 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」をリリース。

↓やりきった感があったんですけど、イザイも好きなのでよし!録ろうって思ったんです

2024年「E.イザイ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ」をリリース。

2枚のCDを出して、やりきったという思いもあったのですが、その時は最高の演奏でも、次の日に聴いたら「もっとできる!」と思ってしまうので、また機会があれば CDを出したいと思っています。

最後に、華子さんのこれからの思いについて伺いました。

「教える」というより、自分が積んできた経験を次の世代へ広め、「共有」していきたい。と最近強く感じるようになりました。生徒たちには、「今私がみんなに伝えている、楽譜の読み方や気配の仕方を今すぐに理解できなくても、大人になったとき必ず全て理解できると思うから」と伝えています。私が今伝えなければ途絶えてしまうかもしれない大切なことだからこそ言葉で簡潔に、的確に伝えたいと思っています。

私の経験を惜しみなく伝えて、一人でも多くの人に受け取ってもらい、またその先へと繋いでもらえるよう、これからも歩んでいきたいです。

インタビュー:2025年10月末日

クラシックを主軸にしながらも、タンゴに挑戦されたり、「知りたい!」という気持ちが最近は チェロも始めたという華子さん。「わからない」で終わらせず「やってみる!」という姿勢がとても素敵だなと思いました。